昭和47年1月30日発行通巻45号(毎日曜日発行)　昭和46年2月5日国鉄首都特別扱承認雑誌第516号

AE 朝日=ラルース

1/30
220円
45

週刊 世界動物百科



朝日新聞社

読者のみなさまへ

こんな動物が登場します　動物を機械的に五十音順に並べたものではありません。系統だった分類に従って，われわれの親しみやすいサル類から始め，次の順序と冊数でお届けしています。概説(2)，哺乳類(62)，鳥類(64)，爬虫・両生類(16)，魚類(16)，軟体動物・昆虫類・甲殻類・腔腸動物などの無脊椎動物(32)。《1～64号の内容は表3参照》

総目次と総索引がつきます　見て，読んで，楽しむ〝百科〟としてだけではなく，引いて調べる〝事典〟としての機能を完全にするため，16冊ごとにその総目次をつけ，また最終192号には詳細な総索引をつけます。この両者によって，動物界の構成がひと目で理解でき，調べたい動物がすぐ引きだせます。

『私たちの仲間』のページ　カラーページをより理解しやすいものにするため，日本の第一線動物学者の執筆による解説や注があります。また〝動物週刊誌〟として，動物界のニュースや話題，楽しい読物，実用記事などを掲載しています。

ファイルで保存してください　全192冊を，発行順に16冊ずつ，美しいファイル（販売中・定価600円）に，とじこんでください。堅牢で豪華な，全12巻の〝動物百科事典〟がそろいます。途中から購読されたかたは，ぜひ第1号からおそろえください。バックナンバーのお求めは，このページ右欄『本誌の購読について』をごらんください。

目次

世界動物百科　第45号

カラーページ

私たちの仲間

凡　例

□本文中〔　〕を使ったものは，日本版のために付加した説明である。
□くわしい注釈が必要なものには，その語のあとに〔注1〕と番号を入れ，『私たちの仲間』第27ページに，同番号で記載した。
□動物の種名は，原則として和名（一般に通用している外来語を含む），学名（イタリック）の順で表記した。
和名の多いものについては，併記したものもあるが，専門家と相談のうえ編集部で決定した。
和名のないものは，英名または仏名をカナ書きで入れ，原語（ローマン）を付記した。
□人名，地名は，本人または，現地読みを原則としたが，慣用の固定しているものはそれに従った。

本誌の購読について

本誌は，全国の書店，朝日新聞販売店で取り扱っております。
毎週定期的に，配達をご希望されるかたは，お近くの，取扱店にお申込み下さい。
なお，本社直接購入のご希望は，下記あてお申込みを願います。送料は，1部につき30円です。

朝日新聞東京本社出版業務部
東京都千代田区有楽町2－3　〒100 TEL 03－212－0131
朝日新聞大阪本社出版業務部
大阪市北区中之島3－3　〒530 TEL 06－231－0131
朝日新聞西部本社販売部出版業務課
北九州市小倉区砂津1－12－1　〒802 TEL 093－53－1131
朝日新聞名古屋本社販売部出版業務係
名古屋市中区栄1－3－3　〒460 TEL052－231－8131

次号予告

1月26日発売



世界動物百科
46号　2／6

カラーページ

偶蹄目 シカ・ウシ亜目
□ウシ科 ヤギ亜科
ヤギ属(つづき)
ヤギ(飼育種)
アンゴラ種
カシミール種
ジャコウウシ属
ジャコウウシ
カモシカ属
ニホンカモシカ

私たちの仲間

毒と罠と銃声　藤原英司
2 オオカミの挽歌
ソ連の動物園を訪ねて　広崎芳次
日本とその周辺の在来ヤギ　野澤　謙
カラーページ解説
穴と匂いの周辺　畑　正憲
ヒグマと2人のイノシシ 43
子（ねずみ）　竹内照夫
十二支の話 2
読者のアルバム 9
スイスのデパートで

私たちの仲間
45号……1月30日

オオカミの挽歌

藤原英司

1 〝恐怖〟の名を背負って

1930年の春，アメリカのモンタナ州中部にある田舎町スタンフォードは，突然，熱狂的な歓呼の声に湧きかえった。その日，町の通りに全長2メートルにおよぶ白いオオカミの死骸がさらされたのである。喜びにわく人々の口からは，しきりに〝スノードリフト〟(吹雪）という言葉がもれた。それは血に染まってさらしものとなったオオカミの名前だった。

スノードリフトは，討ちとられるまでの13年間に，約1500頭のウシを殺した。つまり，毎週およそ2頭ずつのウシを殺しつづけたということになる。しかも，スノードリフトが荒らしまわった領域は，ベルト山脈からハイウッド山へいたるジュディス盆地と，西のミズーリ河の流域一帯にひろがる広大な土地だった。

スノードリフトは，ふつうのオオカミより足が長かったといわれ，駿足をかって神出鬼没の奇襲をくりかえした。一昼夜のうちに200キロを走った記録が残っている。これは日本で考えるなら，今日東京でウシを殺したと思うと，明日は静岡あたりで別の牧場を襲ったということになる。60〜70キロ離れたところへ出没するのはしょっちゅうだった。つまり，東京と大磯ぐらいの距離は，簡単に移動していたわけである。



え　清水　勝

このオオカミはおそろしく奸智にたけていた。同じ場所へは2度と続けて姿をみせなかったし，ウシを倒して腹ごしらえがすむと，さっさと山へひきあげた。また，食べかけの獲物のところへは2度と戻らず，いつも自分で殺した獲物だけを食べた。従って，毒餌はしかけようがなかった。さらに，このオオカミは若いころ1度罠にかかったことがあった。そして，左側の前足の足指を1本はさみとられていた。その時いらい，罠には驚くほど敏感になっていた。

オオカミはふつう数頭から10数頭で群れをなして行動するが，スノードリフトは徹底して，いつも孤独を守りとおした。そのためこのオオカミには，群居性がもたらす盲目的な行動というものがなかった。

スノードリフトの首にかけられた賞金は，どんどん増額され，ついに500ドルにはねあがった。アメリカ各地から賞金めあてのハンターが集まり，中には，はるか東部のニュー・ジャージーから出かけてきたものもあった。だが，どの狩りもことごとく失敗した。当時，西部で敏腕をうたわれた罠師兼ハンターのボブ・ケナンとバーニー・ブラナンでさえ，このオオカミには歯がたたなかった。

ケナンとブラナンが最初にとった手段は，臭いによって相手をあざむく方法だった。罠をかけたことをさとられないために，鉄と人間の臭いを消し去ったのである。2人はまず平原に生えているヨモギ類の雑草を集めてきて，大釜でぐつぐつ煮立てた。そしてその中へ自分たちの長靴を突っこんで煮こみ，靴についている人間の臭いを消した。2人はその長靴をはいた上から，さらに両足を靴ごとヒツジの皮ですっぽり包んだ。それでも安心できず，ウシの死骸からひづめをとってきて，足の裏にくっつけた。つまり2人が歩いた跡には，ウシの足型しか残らないようにしたのである。

罠はヨモギを焼いた煙でいぶしたあと，長靴を煮た時と同じ要領で，煎じ薬のようなヨモギの煮汁につけた。そして釜からあげたあと，全体にウシの脂をたっぷり塗りつけた。罠をつかむ時は手袋をはめ，その手袋も，むろんヨモギの煮汁でじゅうぶん煮こんだ。

つぎに2人は地面を浅く掘って罠を埋め，土の表面をきれいになおして，まわりと見分けがつかないようにした。そしてさらにその上に，何気なく枯草を撒いた。どこから見ても，そこは平原の他の部分と，少しも変わったところがなかった。

だが，これだけの用心を重ねて罠を仕掛けても，スノードリフトはかならず罠をよけた。あるいは2度とその通路を通ろうとはしなかった。そして，2人が仕組むすべての策略と，すべてのおとりを見破った。ほかのオオカミはたちどころにだまされたが，スノードリフトだけはけっしてだまされなかった。

オオカミ猟師が，こういう手ごわい相手に対してとる最後の奥の手がある。それはさかりのついた時期に，雌オオカミを使って仕留める方法である。当時，西部には雌オオカミを生け捕りにして飼っているハンターがいた。おとなになったオオカミは扱いにくいので，たいていが子どもの時から育てたものだった。その雌オオカミをおとりにして，野生の雄オオカミをおびき寄せ，射殺したのである。

スノードリフトに対しても，この手が試みられたが，この白いオオカミはけっして色仕掛けの誘惑にのらなかった。だが，スノードリフトは雄としての生殖機能を欠いていたわけではない。繁殖期には，ちゃんと野生の雌オオカミを妻に迎えた。



オールド・スリー・トーズ
と呼ばれた
狡猾なオオカミ
撮影　L. J. Bayer
提供　Interior Bureau of Sport Fisheries & Wildlife

1923年の初め，ブラナンはスノードリフトが野生の雌オオカミといっしょになったことをつきとめた。ブラナンはおよそ2か月かけて2頭のオオカミの動静を探り，雌オオカミに子ができるまで，ねばり強く待った。そして巣穴を急襲し，雌オオカミと子を殺した。だが，ついにスノードリフトを殺すことはできなかった。スノードリフトは危険が迫ると，いち早く現場から逃走し，自分の妻にも子どもにも，なんら執着を示さなかったのである。

結局スノードリフトは13年目に，他の牧場主によって討ちとられた。その牧場主はウマで見まわりに出かけた時に，スノードリフトが肥った子ウシを食べているところへ出くわしたのだ。ところが，どういうわけか，スノードリフトは逃げなかった。そして簡単に射殺されてしまった。

その牧場主は殺したあとで，それがスノードリフトだということを知った。左の前足が3本指だったからだ。口をあけてみると奥歯が抜け落ち，前歯もがたがたになっていた。これで，男が近づいても逃げなかった謎が解けた。スノードリフトは老衰のため耳が遠くなり，ウマの足音がよく聞こえなかったのだ。

結局，このオオカミが討ちとられたのは，人間の知能によってではなかった。老衰による肉体の衰えが，白狼の寿命をちぢめたにすぎない。

勇名をとどめる西部開拓史

当時アメリカの西部で暴れまわったオオカミの記録は，まだまだいくらもある。〝スリー・トーズ〟（三つ指）と呼ばれたオオカミは，ダコタ州のハーディング郡で1910年から1925年にかけて，家畜を荒らし，ある時期には3か月間で，6700ドルにのぼる損害をもたらしたという。

1890年代にはニュー・メキシコ州に，ロボと呼ばれるオオカミが現われた。ロボはスノードリフトや三つ指に劣らず，知能の高いオオカミだった。罠師だったシートンは，5年がかりでロボを倒した。シートンはすべての試みに失敗したあげく，最後に，ロボの妻であったブランカという雌オオカミを捕えた。そして，その足を切りとって罠の上に足跡をつけ，ロボを罠におとし入れたのだった。

南ダコタ州のブラック・ヒルズを中心に暴れまわったカスター・ウルフと呼ばれるオオカミについては，アメリカでいろいろな人が，たくさん本を書いている。カスター・ウルフは，9年間，牧牛を殺しつづけたが，結局ロボと同じような方法で，罠におちた。

1900年代の初期にコロラドで有名になった〝オールド・レフティ〟（左ききの老いぼれ）というオオカミは，足が1本なかった。罠にかかった足を自分で噛み切って逃走したのである。そして3本足のまま家畜を殺しつづけ，討ちとられるまでに384頭の獲物を倒した。

そのほか〝ビッグ・フット〟（大足），〝グリーンホーン〟（まぬけ），〝ファンタム〟（化けもの），〝ジャンボ〟（でかぶつ），〝オールド・ドクター〟（老博士），〝ブラック・デビル〟（黒い悪魔）など，アメリカの開拓史には多くの豪勇オオカミの記録がちりばめられている。

人間は古来，目のかたきにしてオオカミを殺しまわり，激しい恐怖心をオオカミに対して抱いた。ところが，オオカミの害は初めから直接人間に対するものではなかった。オオカミはつねにウシやヒツジを襲ったのであって，人間を襲ったのではない。必要以上の殺しを働いたといわれるカスター・ウルフでさえ，その襲撃対象は，いつも家畜であった。

1940年に，野生生物局でオオカミを研究していたスタンレー・ヤングは，オオカミと人が対決したいくつもの例を調査した。そして，オオカミは人を襲わないという結論を導いた。また，同年，カナダのジェームズ・カランというジャーナリストは，『オオカミは噛まない』（Wolves Don't Bite）という明快な表題の本を出版した。彼はオオカミがほんとうに人を襲ったという確証ある資料を提供した人には，100ドルの賞金を与えると広告した。そして，彼の手元に集まったさまざまな〝実話〟を調査した結果，このような本を出すにいたった。

1963年になって，リー・スミトスという人が，それまでにアメリカで起こったオオカミによる襲撃レポートを，しらみつぶしに調べてまわった。その結果，彼は〝今日まで，アメリカで健康なオオカミが，はじめから人を襲おうと思って襲撃した事実はない〟という結論をだした。しかし，この報告には〝健康な〟という条件がついている。つまりこれを裏返せば，不健康なオオカミは人を襲うということになる。では，その〝不健康〟とは，具体的になにを意味するのであろうか。これは端的にいえば〝狂犬病〟であり，アメリカでは，1833年に，その記録が残っている。

戦いをいどむ狂ったオオカミ

毛皮商人ラーペンターは1833年7月に，モンタナからイエローストーンへ向けて，何人かの仲間と旅を続けた。ビッグホーンの近くでキャンプした時，一行は1日か2日前に，その近くでウマと人が気違いオオカミに食いつかれたという話を聞いた。それも，噛まれた人間はみんな気が狂ったということだった。そしてその夜，一行のうちの3人がオオカミに顔を噛まれ，そのうちの1人は，耳と顔に相当ひどい傷を負ったという。

その夜おそわれたのは，人間だけではなかった。オオカミは一行のウシをも襲ったという。そして，最後にひどく噛まれた雄ウシは，ビッグホーン河畔へ着いたあと〝発狂した〟と記録されている。

噛まれた男達のその後の記録がないのが残念だが，ウシが狂ったという記録からみると，この時，ラーペンターのキャンプを襲ったオオカミは，狂犬病に冒されていたと思われる。

1949年に，カナダのオンタリオで，鉄道工夫のマイク・ダジークがオオカミに襲われた。そのとき彼は，ひとりで簡易運搬機にのって，工事現場に向かう途中だった。突然，彼は強い衝撃を受けて，運搬機ごと雪の中へ投げだされた。なにかがひどい勢いで彼にぶつかってきたのだ。マイク・ダジークはあわてて雪の中からとび起きた。すると15メートルほど離れたところに，オオカミが立っていた。しかもそのオオカミはたちまち，ダジークめがけて襲いかかった。

「わたしは両手に1本ずつ斧をつかんだ。そして，オオカミがわたしめがけてはねあがった時，相手の腹をなぐりつけた。しかし，それで斧は1本，どこかへふっとんでしまった。オオカミはずっと唸りつづけ，歯を鳴らしていた。それからオオカミは，あたりをぐるぐるかけ回るのをやめ，わたしめがけて，まっすぐにとびかかってきた」

「わたしはオオカミと15分ほど戦った。そして，できるだけ鉄道のそばの開けたところから離れないようにしようと奮闘した。わたしはなんとかしてオオカミの頭に強打を浴びせたいと思った。何回か打撃を加えたが，とにかく攻撃が早い。目にもとまらぬ早さで攻めたててくる。わたしは倒れたらおしまいだと思って頑張った」

「そのうちに，わたし達は戦いながら線路の北側へ移り，そこでさらに10分ほど戦った。それから西行きの貨物列車がやってきた。機関士と釜焚き係り，ブレーキ係りの男が，つるはしやスコップなどをつかんで，機関車からとびおりてきた……」

結局，機関士たちの協力でそのオオカミは殺された。

1960年代にはいって，オンタリオ大学の動物生態学教授ダグラス・ピンロット博士は，この事件を再調査した。彼はオンタリオ土地森林局で，オオカミの研究計画を指導した人である。そして結局「このオオカミの行動は，狂犬病にかかったものであることを示唆している」という結論に達した。

この調査に関連して，ピンロット博士は「北アメリカにおいて，オオカミが人間を襲ったり脅迫したりしたという確証ある事例は，きわめて稀である」と述べ，「1000件の凄惨な報告のうち，999件は誇張と想像による虚構である」との判断をくだした。

ではそのように〝安全〟なオオカミが，なぜ一般に信じられているように

〝猛々しい恐ろしい獣〟になったのであろうか。

暗黒の洞穴にこだまする銃声

1730年代の後期に，コネティカット州のポンフリットにかなり狂暴な雌オオカミがいた。この雌オオカミは，当時ポンフリットの西にひろがっていた森に巣をかまえ，毎年，新しい子をともなって，家畜荒しを働いた。開拓民はたいてい子オオカミをやっつけたが，親の雌オオカミには，いつも逃げられた。

1739年，牧場を経営していたイズレアル・パトナムは，一夜のうちにヒツジやヤギ75頭を殺され，かんかんに怒った。そして，近隣の人々とともに討伐隊を組織し，その雌オオカミを追いつづけた。やがて努力のかいあって，猟犬の群れがオオカミを穴に追いこんだ。場所はパトナムの家から8キロほど離れたところだった。

穴の中は真っ暗で，なにも見えなかった。しかし，イヌを穴の中へ送りこむと，つぎつぎ負傷して逃げだしてきた。いっぽう雌オオカミは，なにをやっても穴から出てこようとしなかった。そこでパトナムは，近所の人々の反対を押しきって，自ら穴にもぐりこみ，そのオオカミを討ちとることに決めた。

彼はまずはじめに，カバの木の皮や，よく燃えそうなものを集めて松明をつくった。それから両足に綱を結びつけ，合図したらその綱をひっぱってもらうことにした。パトナムは松明を面前に押したてて，頭から先に穴の中へ這いこんだ。パトナムはオオカミの居場所をつきとめると，ただちに足についている綱を蹴った。そしていったん外へ引っぱりだしてもらった。

穴の外に出ると，パトナムはすぐに銃にシカ弾をつめた。そして，松明と銃を両手にべつべつに持って，ふたたび穴へもぐりこんだ。彼は前よりもいっそうオオカミにつめ寄った。オオカミは凄いうなりをあげ，牙を鳴らして，頭を低くさげた。とびかかる構えである。パトナムはオオカミが跳躍するまぎわに，相手の頭を狙って発砲した。轟音はトンネルにこだまし，もうもうたる硝煙がたちこめ，パトナムは息がつまりそうになって，そのまま気を失った。そして気がついた時には，いつのまにか，ほら穴の外へ引きずりだされていた。彼は穴の外でひと息いれると，硝煙が消えるのを待って，三度，松明をかざして穴へもぐりこんだ。

オオカミは穴の奥にじっとしている。そこで彼は思い切って近づいていき，オオカミの鼻面に松明の火を押しつけた。だが，オオカミはもう死んでいて動かなかった。パトナムはオオカミの耳をつかみ，足についている綱を蹴った。そして，オオカミとパトナムはいっしょに穴の外へ引きずりだされた。

歴史は古い，人類との抗争

この事件の主人公パトナムは，のちに独立戦争でパトナム将軍となって登場することになる。そして，彼の若い日のオオカミ狩りの冒険は，この国民的英雄をたたえる武勇伝として，あまねくアメリカの若者たちの間にもてはやされるようになった。

〝偉大なパットとオオカミ〟の物語は，若者たちの間に，勇気ある男の気概を植えつけたが，同時に，もうひとつ，オオカミに対する偏見をも，人々の心にしっかりと植えこむことになった。この物語から，当時の若者が受けたオオカミに対する印象は，家畜を殺戮し，人が近づけば，牙を嚙み鳴らし，目をぎらぎらさせてとびかかろうとする猛獣というイメージであったにちがいない。しかし，これは追いつめられた動物が等しく示す反応であり，けっしてオオカミだけの特性ではない。従って，このような物語から，オオカミに対する恐怖をつのらせるのは筋違いといわなくてはならない。つまりパトナムの話に，人々がたちまち恐怖におちいり偏見を助長させたのには，それなりの背景があったといえる。そして，その背景をさぐるには，アメリカという新世界だけをみていたのではわからない。新大陸へ移住した人々の故郷，すなわちヨーロッパへ目を転じ，その歴史をかなり古くまでさかのぼらなくてはならない。

オオカミと人間の対立は人類史とともに始まるといわれるくらいで，人によっては，すでに2700年の抗争の歴史があるというほどに古い。特にイギリスとフランスには，その記録がもっとも多く残っている。つぎにその記録のほんの一例をあげてみよう。

初期のアングロサクソンたちは，1月をウルフ・マンス（オオカミの月）と呼んでいた。これはきびしい冬が一段と深まる1月に，例年，山からオオカミが餌あさりに里へおりてきたからである。オオカミたちは人里をうろつき，ニワトリや家畜をつぎつぎとかすめた。毎年冬になるとくりかえされるオオカミの被害が，人々の憎悪をつのらせたことは想像にかたくない。

当時は，弓矢か刀，槍，少し時代がくだって，原始的なラッパ銃ぐらいが，オオカミに対抗できる武器だった。つまり，狂暴なオオカミが現われると，人々は自分の生命を危険にさらしてオオカミと対決しなくてはならなかった。その結果，オオカミを討ちとった者は，その武勇をたたえられることになり，いっぽうオオカミは逆に，ますます悪と恐怖の権化という印象をふかめる結果になった。

1427年，ジェームズ1世はオオカミを倒した者に男爵の位を与え，貴族の仲間いりをさせることにした。また，ヘンリー3世は1216年から50年間，変わった土地制度をきめた。オオカミを撲滅することに尽力した者に，土地を下付することにしたのである。もっと傑作なのは，965年にイギリス（イングランド）で実施された罪人の罰し方だった。それは，一定数のオオカミを殺せば罪が許されるというもので，人間の罪のあがないを一身に背負わされたオオカミこそいい迷惑だった。

このほかフランスのジェイボーダーンで暴れたオオカミの話，ナポレオン1世の定めた〝狩狼指揮官制度〟など，フランスにおけるオオカミの害もかなり知られている。パリのルーブルという地名は，人々がオオカミの繁殖地という意味で Louvrier と呼んでいたものが，のちに Louvre となったもので，昔，そこはオオカミの巣になっていた。

ユーラシア大陸で，古くからオオカミの害が絶えなかったのはロシアである。このロシアで，トロイカに乗った貴族がオオカミに襲われたという話があり，それはのちにまことにリアルな絵画となって，ヨーロッパやアメリカに伝わった。スターリング・ノースによれば，この種の絵は似たものがいろいろあって，1800年代のアメリカに広く流布し，これがオオカミに対する偏見を助長したことは疑えないという。

ヨーロッパにおけるオオカミと人との戦いは長かったが，とにかく今日，ヨーロッパの大部分の場所で，オオカミはすでに幻の動物となってしまった。人々の記憶に残されたものは，伝説や民話で色付けされた恐るべき害獣の印象だけである。そしてこの印象がまだなまなましい現実の問題であった時代に，人々はその印象をそっくりそのまま身につけて，新大陸へ渡っていったのだった。■





罠にかかったロボ（上）とブランカ（下）
シートン博物館蔵
提供　内藤悦正氏



モスクワの〝アンアンじいさん〟

広崎芳次



中央の建物が寝室，右の鉄柵内が運動場になっている

昭和46年10月20日の夕方，3日前に降った25センチほどの雪がまだ残っているモスクワ動物園を訪れた。

動物園の飼育事務所は，創立以来107年間の動物たちのにおいがしみこんだような古びた2階建の建物で，薄暗い階段をのぼった一室が副園長のボレスラボウィッチさんの部屋であり，大がらの同氏がニコニコしながら筆者の来訪を待っていてくれた。ソ連では副園長が飼育実務の専門家であり，最高責任者である。

あいさつもそこそこに「気を悪くされるかもしれないが，日本にはアンアンの最近の消息がさっぱり伝えられず，2か月前に死んだらしいというニュースも流れている。もし元気でいるならばぜひ見せてもらいたい」と申し入れた。

副園長は「そういううわさが流れることは，じゅうぶんに考えられることだ。アンアンは元気でいるけれども，なんといってもあと半年で14歳半となり，今までの飼育下における最長生存記録を更新することになるほど年をとっているからね。まあぜひ見ていって，日本の皆さんにアンアンの現況を伝えてほしい」といって快くアンアンのところへ案内し，おりの中にはいって写真をとる便宜まで与えてくれた。

日本ではオオパンダは世界の希少動物としてよく知られており，モスクワ動物園に飼われているアンアンの名は，わが国では雑誌名や銀座のクラブの名称にまで使われているほどであると話したが，ソ連ではあまりよく知られておらず，国際野生生物保護基金（W.W.F.）のシンボル・マークに，オオパンダが使われていることも知られていないようであった。

アンアンのおりは他の動物と同じように，寝室と運動場の2つに分けられていた。屋外の運動場は屋根つきの鉄柵（てつさく）で囲まれている。屋内の寝室は二重の構造になっていて，鉄柵で囲まれたおりの外側に暖房用のラジエーターのある作業通路があり，その外側は動物舎の壁面である。

そこには大きなガラス窓がはまっており，観客はその外側の人止め柵のところからでなければ見ることができないようになっている。

このため，アンアンが薄暗い寝室の中でじっとしていれば，観客が見過ごしてしまうことは容易に考えられ，モスクワ動物園をたずねたがアンアンはいなかった，といわれることもありうるわけである。

飼育係専用の裏口からはいっていったとき，アンアンは筆者らからもっとも遠い所にあたる部屋のすみの明るい窓ぎわで，首をからだのなかにうずめて居眠りをしているようすであった。飼育係のレーナーさんがアンアンに呼びかけると，むっくりと首をもたげ，おもむろにからだの向きをかえ，〝何か用かね〟といったふうにこちらを見た。そのものうげな態度は，まさに年老いた〝アンアンじいさん〟という感じであった。

寝室の三方の側面は鉄柵で囲まれていたが，残りの一面はコンクリート壁となり，その下側には鉄格子（てつごうし）がはめこまれていて，そこからも暖かい空気が送りこまれ，零下30度以下になる厳寒期でも，室内は5,6度に保たれるようになっている。

その鉄格子の前のコンクリートの床には，板張りのごく低い台が置かれていて，アンアンがその上で横になって休めるようになっていた。

鉄格子に向かいあった反対側の鉄柵の一部分は，運動場への通路となっており，四六時中いつでもアンアンの気の向いたときに，運動場と行き来することができるようにとびらはあけはなたれていた。

アンアンは日中はおとなしすぎるくらいであるが，日没後あるいは日の出前の薄明時にはかなり活発に動きまわるために，このようにしておく必要があるという説明を聞いて，のんびりとした昼間の動作は，それなりの理由があることがよく理解できた。

オオパンダの主食はタケやササであることはよく知られているところであるが，モスクワ動物園の場合にはこれらの植物の入手が困難であり，しかもせっかく無理して入手して与えたところが，種類が違うためかあまり食べないので，やむをえずコメやエンバクを主とした数種類の材料の混合がゆをつくって与えている。それでも，現在まで病気をしたことがないとのことで，床の上に混合がゆのはいった容器が置かれてあった。

天然では，あのかたいタケやササの葉を食べているのに，おかゆばかりを食べさせたならば歯がのびて困るであろう，と筆者が考えたのを察してか，レーナーさんは部屋の中にころがっていたポプラの幹をアンアンに渡した。すると体重が200キロもあるというアンアンはしりもちをついた格好のまま，そのポプラの幹をかじりはじめた。

縫いぐるみの人形のようにあどけない表情のオオパンダのなかでも，アンアンは万事おうようなソ連人の社会で生活しているためか，とりわけおっとりとしているように思えたが，砂糖入りのチャイ（紅茶）を，夏であれば1日に20リットル，冬でも8リットルは飲むと聞いて，アンアンはやはりモスクワのオオパンダだと感嘆させられた。

ソ連の人びとは，チャイを好んで飲む風習があるが，〝郷に入れば郷に〟とばかりに，アンアンもすっかりチャイの愛飲家（？）の仲間になってしまったのであろうか。もっともロンドン動物園のオオパンダ〝チーチー〟も1日に砂糖のはいった紅茶を10リットルも飲んでいるというから，オオパンダは紅茶好きの動物と考えてよさそうでもある。■

（江ノ島水族館飼育部次長）



ものうげな格好で
ポプラの幹をかじる
〝アンアンじいさん〟



昼間は部屋の片すみで
居眠りをしていることが多い

バーバリシープ属

Ammotragus

バーバリシープ

Ammotragus lervia

バーバリシープ属は、バーバリシープ1種だけである。この動物は、ヒツジ属とヤギ属の中間種とされている。ヤギと同じように、眼下腺(がんかせん)はなく、この点ではヒツジと異なる。またヤギの特徴であるあごひげは、バーバリシープにもあるが、雄のあごひげは雌のものよりも長い。

バーバリシープのからだは、大きくてがっしりとしていて、体長は130〜190センチ、それに長さ25センチほどの尾が加わる。肩までの高さは90〜100センチ、体重は個体により50〜115キロと、差が大きい。

からだつきは力強く、ずんぐりしているが、よく引きしまっている。首は短く、頭部は長いが優美で、額は広く、2本のつのは長くて曲がっている。このつのには少し凹凸があり、ひだができている。2本のつのは、根もとでは非常に近接してはえている。つのの長さは、雄では80センチを越え、雌でも40センチほどになる。四肢(しし)は短くがんじょうで、前肢(ぜんし)のひづめはやや長くねているが、後肢のひづめは短く立っている。

毛並みは厚く、かたく、ざらざらしていて、それほど密生はしていないが、その上を短いちぢれ毛がおおっている。首の下と前肢のつけ根では、他の部分よりも毛が長い。首の下では豊かなふさ状の胸飾りになっており、タテガミヒツジという別名が、この長い毛からつけられた。前肢のつけ根の長毛は、脚(あし)のかなり下のほうまでおおっている。毛の色は、全体としては褐色がかった淡黄褐色だが、耳の内側、あご、腹の中央、それに脚の内側では、白っぽくなっている。

分布地域は、北アフリカのエジプト、エチオピアの山岳地帯、チャド北部などで、スーダンにもいくつかの群れが生息している。ふつう、人間が近寄ることのできないような、山岳部の岩の多い斜面にすんでいる。かれらは少数の家族グループをつくって生活しているが、1つのグループは、成獣の雄と雌、年の違う何匹もの子どもたちからなっている。

交尾期になると、雄どうしが激しく争う。頭を下げ、つのを振りたてて、相手に向かって突き進んでいく。またつのをからませて、



バーバリシープ。ウシ科バーバリシープ属。
高い絶壁の上でも目をまわすことはなく
疑い深そうな目で下界を警戒している。
バーバリのヒツジという名のとおり
北アフリカの乾燥した山岳地帯にすんでいる。
PH. RUSS KINNE-PHOTO RESEARCHERS





狭い岩棚の上で押しあったりもする。アラビア人は、その勇敢さと、つののじょうぶさをほめたたえ、バーバリシープのつのはゾウの頭骨を割るほどの威力がある、と伝えている。

バーバリシープが生息する地方には、木がほとんどないので、危険を感じても、木陰に身を隠すことはできない。そこで、いつまでもじっと動かずにいて、敵の目をくらますという、驚くべき能力を身につけている。生息地には水場がごく少なく、しかもその間隔が非常に離れているので、夜露や、草に含まれているわずかな水分だけで、がまんしなければならないようなことも、よく起こる。

妊娠(にんしん)期間は、154～161日で、1腹に2，3頭の子が生まれる。寿命は、15年ほどである。粗食に耐え、少しの水で生きられるので、他の動物がすめないような所にいるうえ、肉の質がよく、皮がじょうぶで、毛が柔らかいので、砂漠性風土の地方にすむ人びとにとって、なくてはならないものとなっている。

飼育状態によくなれ、飼育下でも繁殖するので、動物園でもたくさん飼われている。アメリカ合衆国への移入は、すでに成功をおさめており、ドイツ民主共和国(東ドイツ)では、飼育種のヤギと交配させ、繁殖力のある雑種をつくりだすことによって、ヤギの品種改良に役だてている。

バーバリシープの親子。
子どもは生まれたときにすでに目を開いており
数時間たつと，もう親のあとについて
岩山をはねまわるようになる。(上)

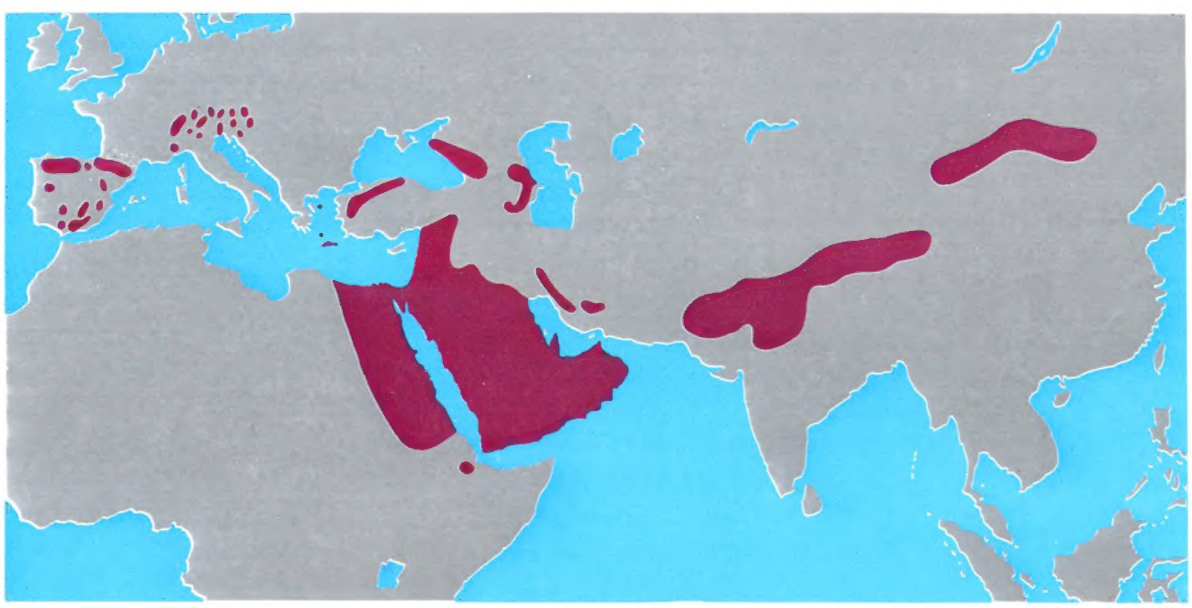
PH. S. A. THOMPSON



ヤギ属　*Capra*

ヤギ属の動物はどの種も，がっしりとした体格と，短くてじょうぶな四肢(しし)をもっている。首は太く，頭部はわりあいに小さい。額は狭くて，中央が高くなっている。尾は断面が三角形をしていて，腹側(つまり下側)には毛がなく，たいていまっすぐにぴんとのびている。尾のつけ根には尾下腺(びかせん)といわれる臭腺(しゅうせん)があり，そこからは不快な臭気を帯びた液体を分泌(ぶんぴ)する。雄はこの臭気がとりわけ強く，これは《雄ヤギのにおい》と呼ばれている。

ちょっと見るとヒツジ属の動物によく似ているが，ヒツジの毛が柔らかく脂肪の付着が多いのに反して，ヤギの毛はふつうかたく，



バーバリシープ。
たてがみは雄ではとくに長くのびて前肢を半分ほどもおおっている。つのも雄では84センチにも達する。(左下)
PH. MARKHAM

ヤギ。ウシ科ヤギ属。
長いあごひげが顔つきをいっそう柔和に見せているが，これはヤギ類の特徴である。同じ群れのなかでも，つのは雌雄にかかわらずはえたり，はえなかったりする。(上)
PH. BUZZINI

ヤギ属の分布。
アジア，ヨーロッパ，アフリカの山岳地帯に多くすんでいる。

[illegible]　今泉吉典





脂肪分に乏しい。またヒツジには眼下腺(がんかせん)，蹄間腺(ていかんせん)などの脂肪分泌腺(ぶんぴせん)があるが，ヤギにはない。ヤギ属の足はヒツジ属の足よりも強く，管骨がしっかりしているので，起伏に富んだ土地を軽々と歩きまわる。耳はたいていの場合，まっすぐにのびてとがり，きわめてよく動く。

ヤギ属には雄にも雌にもつのがある。つのは年をとるとともにひだが多くなっていく。形は種によって異なり，サーベルのようにやや後ろに曲がったり，ネジのようにらせんを描いたりしている。雄のつのは，雌のつのよりもはるかに大きいのがふつうである。

ヤギ属の毛は，2種類の毛からできている。すなわち下毛または綿毛と呼ばれる，細くて短い羊毛のような毛と，それをおおっている，上毛または粗毛と呼ばれる，長くてざらざらした毛とである。上毛は，多くの種ではかなり密生しており，からだのいくつかの部分では，長くのびて飾毛になっている。毛色は，ふつう，くすんだ白色，褐色，灰色である。

飼育種のヤギは，世界じゅうの国々に持ちこまれて飼われているが，野生のヤギ属の動物は，アジアの中部と西南部，ヨーロッパ南部，アフリカ北部にだけ分布し，とりわけ山岳地帯に生息している。かれらは人間がほとんど近寄れないようなけわしい山を好み，多くのものは万年雪の下限付近のような，高いところまでいく。

ヤギ属のすべての種が，群れをつくって生活している。年とった雄は，よく群れを離れてひとりでいることがある。それ以外のものは，ひとつは若い雄，もうひとつは雌と子どもたちというように，雌雄が別に群れをつくっている。山で生活する多くの動物と同じように，ヤギ属の動物たちは昼行性である。というのは，山では夜の寒さがきびしく，また光のほとんどないことも多いからである。だからかれらは，朝と夕方を選んで移動する。

山にあるどんな植物でも食べるが，柔らかい草や，小さい灌木の葉をとくに好む。食いしん坊で，えさのたくさんある所を求め，おいしい草を捜してあちこちと移動する。塩がとても好きで，塩のある所によく出かけていく。また水もたくさん必要とするので，泉や小川のない乾燥しきった土地は，注意深く避けている。

感覚は，いずれもよく発達している。視覚，聴覚，嗅覚(きゅうかく)が鋭敏なので，遠いところから危険をかぎつけることができる。明敏で，わりあい利口な動物といえよう。

どの種も，人間にとって有益なものといえよう。ある地方では畑や森林を荒らして，人間に損害も与えるが，そんな損害はかれらが人間に与える利益によって，ほとんど全部帳消しになってしまう。とくに，ヨーロッパ南部の荒れはてた山岳地帯のようなところでは，ヤギなしではとても人間は住めないだろう。

飼育種のヤギは，乳用，毛用，肉用に広く利用され，ヨーロッパではヤギの乳からチーズをつくる。野生種のヤギも，これに劣らずすぐれた利用価値があり，肉や皮，毛，毛皮，つのが利用されている。

ヤギ属を分類することは，かなりむずかしい。さまざまな種や亜種が，たがいによく似ているし，生態の観察も困難だからである。次にアイベックス，パザン，マーコール，ヤギについて述べよう。

ヤギ。ミミナガヤギと呼ばれる，パキスタン原産の品種で，その名のとおり耳が非常に長い。
写真のものは２頭ともまだ子どもだが
その特徴をよく示している。
インドのデリーにて。(上)

撮影 内山 晟



ヤギの群れ。
紀元前3500年というむかしから人間に飼われ
乳用，肉用，毛用に広く利用されて
人びとに親しまれてきた。
インドのジャイプールにて。







アイベックス　*Capra ibex*

アイベックスは、野生のヤギ属の一種である。分布地域によって多くの亜種があるが、アルプスアイベックスがもっとも有名である。堂々として気品のある姿をした，すばらしい動物といえよう。

体長は150～160センチ，肩までの高さは80センチほどで，体重は雄では75～120キロ，雌では50～55キロである。力強さと耐久力とを絵にしたような動物で，からだつきはがっしりとしている。首の長さは中くらいだが，頭はかなり小さく，額(ひたい)は非常に突きでている。四肢(しし)は，どちらかというと短いが，きわめて力強い。

つのは雌雄ともにあるが，雄の成獣では驚くほどの大きさになり，しかもきわめてがんじょうである。つのは弓形，あるいは三日月形の単純なカーブを描いて，後方に曲がっている。つけ根ではかなり太く，2本のつのは非常に近接しているように見える。先のほうへいくにしたがって離れ，またただんだんと細くなっている。つのの成長を示す輪状の高まりは，とくに外側ではっきりしていて，つののへりが大きくふくれあがり，節をつくっている。

雄のつのはおよそ80センチだが，なかには1メートルに達するものもあり，10～15キロの重さになる。雌のつのは雄よりも小さく，その断面は円に近く，後ろに曲がっていて，浅い横ひだがついている。雌のつのの長さは，15～18センチである。

アルプスアイベックス。
アイベックスはアジア，ヨーロッパ，北アフリカの山岳地帯にすみ，地方によって
いくつかの亜種がある。（左）
PH. BILLE

アルプスアイベックス。
堂々たるつのはさぞ重いことだろう。節は
年輪のようにほぼ1年に1つずつふえる。
つのは雄では長さ1メートル，重さ15キロにも
なることがあるが，雌ではせいぜい18センチ。（上）
PH. BILLE



つのは生まれた月からはえ始める。1年たつと、つけ根の部分に最初の節ができる。2年めには、節は2つか3つになる。雄では3年めには、45センチほどにのび、成長につれて節の数はふえて、24になるものもある。

アイベックスの四肢には、それぞれ2つの側蹄（第2指と第5指）があって、急な斜面を登り降りするのに役だっている。

毛並みは、灰色がかった淡黄褐色で、毛はかたく、季節によって厚さは変化する。冬には長くてさらさらで、ちぢれているが、夏の毛は短くて細く、光沢がある。冬にはふつうの毛の下に、細い羊毛状の下毛がはえるが、暖かくなると抜け落ちる。

アルプスアイベックスは、かつて絶滅の脅威にさらされていた。19世紀に保護策が講じられていなかったならば、おそらく絶滅していたに違いない。

先史時代から、アイベックスはアルプス高地に生息していた。ローマ帝国時代には、この動物は闘技場で使うために、100頭から200頭ずつまとめて捕獲されていたというから、非常にたくさんいたようである。15世紀にスイスでは、乱獲のためアイベックスはむかしほど見られなくなり、以後その捕獲が厳罰によって禁止されるまで、アルプス山中のアイベックスは激しく減っていった。

禁猟区を設けてアイベックスを絶滅から救ったのは、イタリア人たちであるが、なかでも偉大なる狩猟家であった国王、ビクトル・エマヌエル2世である。かつての禁猟区は、かれによってグランパラディ国立公園とされたが、これはバノワーズにある現在のフランス国立公園に隣接している。

アルプスアイベックスの数は、1930年には約4000頭だったが、1945年に第二次世界大戦が終わったときには、500頭以下にまで減ってしまった。今ではグランパラディのアイベックスは、スイス領とフランス領の禁猟区にも移り、7000～8000頭にふえている。

高山の《大悪魔》

前世紀の末、アイベックスはあまりにも少なくなり、群れをつくることができなくなって、幸い生き残った数少ないアイベックスは、まったく人けのない山々に、ちらばって生息していた。この時代に、狩人や山人たちは、非常に切りたった岩の上に悪魔の姿を見たと、ときどき言い張ったものだった。これは実はアイベックスを見たのであり、その炎のように燃える目が、人びとの想像力をかきたてたのである。

今でもイタリアの[illegible]地方では、ひとりでいる雄の年とったアイベックスのことを、《大悪魔》と呼んでいる。

アイベックスは群生する本能のある動物だが、雌はとくにその本能的な行動をとることが多い。雄はひとりでいることを好むことがあり、またなわ張りを守る行動をすることもあるが、これは繁殖期以外でも認められる。

一般にアイベックスは移住はしない。季節の変化にしたがって、山頂から森林限界までの、限られた範囲のなかを、動きまわるだけである。

交尾期以外は、かれらは雌雄別々の群れをつくっている。雌の群れは、年をとった雌の指揮のもとに集まっているが、この老獣が草地から草地へ移る合図をしたり、必要なときには危険を知らせる。子どもたちは、生まれてから次の繁殖期までの間、自分の母親といっしょにいる。

雄たちは、順位制のはっきりした群れをつくっており、そこではめいめいの地位と役割とが、はっきりとした規則で決められているようである。たとえば移動するときには、若いものが前を歩き、その後ろから年とったものが続き、最後にこの群れのリーダーがいく。

雄の群れ、雌の群れはともに、繁殖期にな

[illegible]
聴覚、嗅覚がすばらしく発達して[illegible]
敵が近づくとすぐに気づいて[illegible]
人間の[illegible]にはかなわない[illegible]
PH. P. GUILHERY

アルプスアイベックス[illegible]
草食獣のなかでは、もっとも高いところにすむ
動物で、わずかな草と苔を求めて
山の斜面を移動して[illegible]
PH. BILLE





アルプスアイベックス。ウシ科ヤギ属。万年雪の積もる岩山を見晴らす，日のあたる斜面で，のんびりと食物を反芻している。こんなときでも，前肢の一方はのばし，他方はからだの下に折り曲げて，いつでもすぐに走りだせるように，警戒を怠らない。おもな天敵は，オオヤマネコ，クマなどである。

PH. A.–P. ROSSI







るとそれぞれ分かれていく。

雌と子どもたちは、ふつう雄たちよりも低い土地にすんでいるが、雄たちは山頂のほうが好きで、きびしい冬の寒さと雪のために食物が得られなくなると、はじめて山頂を離れる。アイベックスは暑さには弱いようだが、寒さにはきわめて強い。

あらゆる草食動物のうちで、アイベックスはもっとも高いところに生息している。7歳に達すると、雄たちは自分たちのなわ張りとして、山のもっとも高いところを選ぶ。かれらはきびしい天候にもよく耐え、風の吹きすさぶなかでも、岩の上で、まるで彫像のようにじっと動かずにいる。

かれらが山頂から降りてきても、せいぜい森林限界の上や、氷河の末端までである。こんなに高いところでは、他の動物と草を奪いあうことがほとんどないので、たいていいつでもじゅうぶんな食糧がある。雪が多すぎるときが、ただ1つの重要な問題である。

雄は好んで岬のように突きでた場所を探し、いつもそこにいるが、それは周囲を見張るのにつごうがよいからである。アイベックスの群れはまた、日あたりのよい斜面が好きで、よく日足を追いかけるようにして移動する。

アイベックスを観察するのにいちばんよい時間は、夜明けから午前6時までと、午後4時から夕暮れまでである。日中のこのほかの時間は、この動物は食べたものを反芻（はんすう）するための時間である。草を食べるところへ行き来するのには、いつでも同じ道を歩いていく。休むときには、高い岩棚（いわだな）の上を好む。そこは安全な隠れ場所にもなるし、広々として遠くまで見晴らしのきく場所でもあるからである。

休んでいる間のアイベックスの姿は、その敏捷（びんしょう）なことをはっきりと示している。つまり後肢（こうし）はからだの下に折り曲げ、前肢の一方は前にのばし、他の一方は折り曲げて、いつでも逃げだせるような姿勢をとっている。ときには両方の前肢をのばしていることもあるが、すぐに走りだせるようにしていることは同じである。

眠るとき、年とった雄はときどき妙な格好をすることがある。つのがとても重いので、頭を休めるために、鼻づらを胸にひきよせ、鼻と額と、つのの根もとを、地面につけるのである。ごくわずかな物音でも、聞きなれない音がすると、すぐに頭を上げるが、またすぐにこの妙な格好の、休息の姿勢にもどる。

アイベックスの動きは、いつも活発で軽快である。駆けると速く、疲れを知らない。傾くはざややすやすと岩壁を駆けあがり、とても信じられないようなしっかりした足どりで駆け降りるので、足はまったく岩についていないように見える。この動物にとっては、ごくわずかな凹凸も、きわめて確実な支点となる。ひづめが非常にしっかりと地面につくので、きわめて狭いスペースでも安全なのである。

あるナチュラリストは、同じ方向に逃げていくシャモアとアイベックスを観察して、こう報告している。「シャモアはあちこちへぴょんぴょん跳びはねながら駆けていったが、アイベックスは障害物を軽々と跳び越えながら、一直線に駆けていった。」

垂直に近いような岩壁を降りる場合、シャモアはまるで落ちていくような猛烈な速さでとび降りるが、アイベックスは反対に、ごくわずかな凹凸にもひづめをかけ、ゆっくりと確実に降りる。

自信過剰が減少の原因

アイベックスの鳴き声は、シャモアの鳴き声によく似ているが、もっと大きい。恐怖にかられると、まるでくさめのような音を出す。おこっているときには、鼻孔で大きな音をたてながら息をする。

感覚はいずれも非常によく発達しており、

[illegible]
体長1.5メートル、[illegible]
体重は50～120キロと、[illegible]
[illegible]
[illegible]
PH. [illegible]

[illegible]
生きるためには[illegible]
乾燥した地域は[illegible]
[illegible]
岩の間からわずかの草を見つけて食べている。
PH. [illegible]



アルプスにすむ他の反芻（はんすう）動物と同じように、この感覚器官を活用している。たとえば雌の群れの見張り役は、視界にはいらない方角からくる敵も、風が運んでくるにおいでわかるようなところにいる。侵入者のにおいは直ちに見張りにかぎつけられ、すぐに逃げだす命令がくだされる。

雄もまた、谷を見晴らす高い地点を選ぶ。侵入者が近づくのを目で追っているが、かなり遠くにいるかぎり不安を示すことはない。

アイベックスにとっては、嗅覚（きゅうかく）による信号は視覚による信号よりも強く作用する。それはおそらく、岩山では侵入者を目で見るのはすぐ近くにやってきてからだが、においによるならば遠くからでも敵を確認できるからだろう。

したがって、これら２つの感覚は、群れの安全を確かなものにするため、たがいに補いあい、結びついている。しかしこの警報のしくみは、他の動物に対しては完璧だが、人間が武器を持ってくると狂ってしまう。アイベックスは、500メートルも下から人間が登ってきても、人間がこの距離をつめるには、かなり長い時間がかかることを知っているので、少しも心配しないで見守っているが、鉄砲のあることは知らないのである。

だからこの動物は、危険を知ると非常に警戒心を強くするが、ふつう侵入者が見えているかぎり、わりあいのんびりとしているのである。このことは、シャモアやムフロンの数がはじめからほとんど変わらないのに、アイベックスが狩人たちによって、絶滅の危機にさらされた原因となった。

アイベックスは、人間のあまりこない遠くの谷間によく出かけていって、そこで朝と午後に草を食べ、その他の休の間は、食べたものを反芻して過ごしている。攻撃される恐れのあるような場所では、もっぱら日の出と日暮れどき、あるいは夜になってから、草を食べにいく。

かれらはいろいろな種類の植物、木の芽とか若葉、草の芽などを食べるが、これらはアルプスでもいちばん新鮮でおいしいものである。またウイキョウやニガヨモギやタチジャコウソウなど、芳香性の植物、背の低いヤナ

アルプスアイベックス。
交尾期には，雄のアイベックスたちは
雌をとりあうために，後肢で立ちあがって
激しくぶつかりあう。

PH. BILLE

ギ、シラカバ、シャクナゲ、イニシダなどの若芽や細い枝も食べる。冬の間は、枯れ草や地衣類などを食べて満足している。

塩が大好物で、確実に塩が手にはいる場所からは、めったに離れない。むさぼるように塩をなめ、そのときには本来の慎重さを忘れて、遠くまで届くようなうなり声をあげて、満足を表わすほどである。

生まれついての登山家

交尾期は1月である。雄たちは、力にあふれ、つのの威力を最大限に生かして戦う。後肢（こうし）で立ちあがって向かいあい、相手の横腹をめがけて、つので激しく突きかかっていく。戦いの間、わずかな叫び声やうめき声さえもたてない。切りたった斜面でこのような戦いはきわめて危険だが、どちらか一方が負傷したり死んだりすることは、ほとんどない。

交尾の後5か月で、つまり6月の末か7月のはじめに、雌は子ヤギくらいの大きさの子どもを、1、2頭生む。雌は生まれたばかりの子どもをたんねんになめまわし、それから自分のあとをついてこられるように、とびはねることを教える。

生まれたばかりの子どもは、優美で、快活で、愛情豊かである。細い羊毛のような毛がはえているが、冬が近づくと、長くてかたい毛にかわる。生まれて数時間たつと、子どもはもう母親とほとんど変わらぬくらいに勇ましく、急な岩山をよじ登る。





アルプスアイベックス
雌たちは、岩の上に陣取って
雄たちの戦いを冷ややかに見おろしている。（上）
PH. BILLE

アルプスアイベックス。戦いにはルールがあり
つのとつのとを激しく打ちあわせ
押しあうだけなので、重傷を負ったり
転落死したりすることはめったにない。（下）
PH. BILLE



45 - 16

アルプスアイベックス
群れは、順位制のはっきりした構成をもち
移動するときのその順番まできまっている。
ふだんは雌雄がそれぞれ別に群れをつくり
交尾期だけはつがいで暮らす。

PH. C. P. ROSSI

母親は子どもに対して非常に大きな愛情を示し，絶えず子どもをなめまわし，道案内をしてやり，まちがいをなおしてやり，やさしい声で自分のそばに呼び寄せる。乳をやるときには，親は子といっしょに岩の陰に隠れている。人間からねらわれていることを知り，逃げることが自分も安全だし子どもも助けられるただ1つの方法だと考えたときには，母親が子どものそばを離れることがある。

危険におびやかされると，母親は，敵の近づくことのできないような，くぼ地や深い峡谷に逃げこむ。一方，子どものほうは，岩穴や大きな岩の陰に隠れ，うずくまって鼻をきかせ，あたりを見まわし，あらゆる方向に聞き耳をたてている。

灰色の毛は非常によく周囲の岩や石にまぎれるので，鋭い視力をもったワシでさえも，見つけられないほどである。危険が去ると，母親は子どものところへもどってくるが，帰りがあまりおそいと，子どもは隠れ家から顔を出して，母親を呼び，また隠れる。母親がいつまでも帰ってこないと，子どもは恐怖と悲しみのあまり逃げだすが，まもなく保護者と別れた場所にもどってくる。

アイベックスは簡単にヤギと交尾する。この交配からは，いつも子どもが生まれる。だから飼育種のヤギが山中で冬を過ごすような場合には，野生のアイベックスとのあいだに子が生まれることがある。

最大の敵は雪崩

この美しい動物は，保護獣として狩人の銃砲の脅威から守られている地方でも，その繁殖は別な危険によっておびやかされている。

アイベックスは人間以外には，それほど恐ろしい敵はない。大きな猛禽（もうきん）類，とりわけワシはアイベックスの子をおびやかすが，ほとんどの場合は母親が機敏に，子どもがさらっていかれるのを防いでいる。オオヤマネコやオオカミやクマは，かつてアイベックスの生息していた地域にたくさんいたが，今では非常に減ってしまったので，それほど恐れる必要はない。しかしもっと恐ろしい別な危険が，かれらをねらっている。

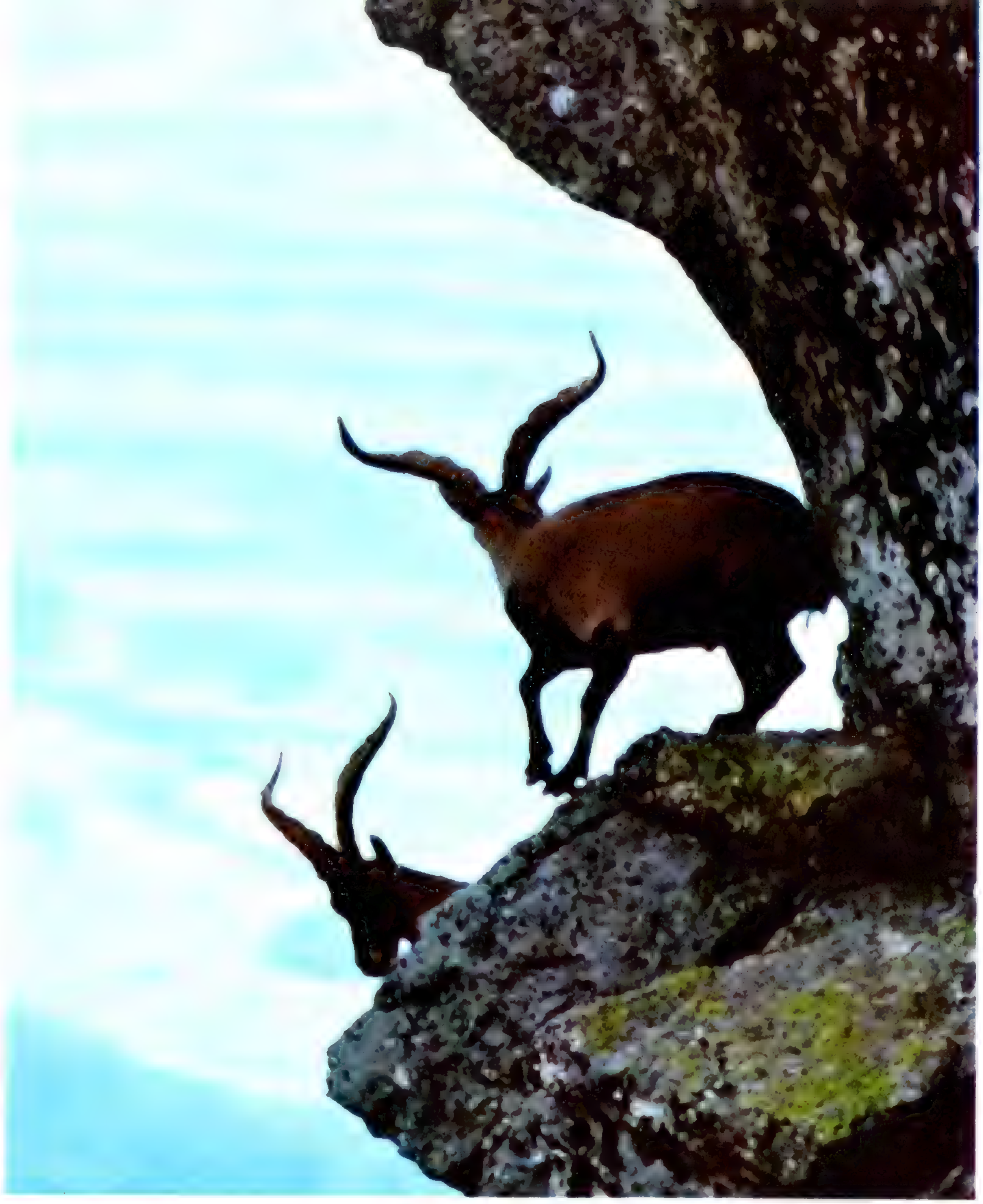
冬や春先，アイベックスの群れは，雪崩によって雪の下に埋められ，死ぬことがある。年とった雄は犠牲となる率がもっとも高いが，それはかれらの巨大なつのが重くて，雪のなか深くもぐってしまうからである。

子どものうちに捕え，ヤギの雌にめんどうを見させると，アイベックスを育てるのはやさしいし，短期間で飼いならすことができるが，大きくなるとたちまちにして，野生にもどってしまう。

アイベックスの子どもは，子ヤギと同じような性質をもっているが，非常に独立性に富んでいて，早くも最初の週から，好んで危険な行動をする。好奇心が強く，陽気で，活発で，自分を養ってくれる母ヤギに強い愛情をもち，よく母親のいうことをきく。

成長するにつれてますます勇敢になり，また荒っぽくなるので，おこらせないように注意しなければならない。成獣の場合には，たけり狂って人間を押し倒し，命にかかわるような傷を与えることもある。

アイベックスには，アルプスアイベックス以外にもたくさんの亜種がある。分布地域は，モンゴル，中央シベリア，カシミール，アフガニスタン，コーカサスの山々から，アルプス，イベリア半島の山々まで，またアフリカのスーダンやエチオピアにもいる。



ピレネーアイベックス *Capra ibex pyrenaica*。フランスとスペインの国境，ピレネー山脈にすむ。アルプスのものとは，つのの形が異なり体毛の色もやや黒ずんでいる（上）

PH. J.-M. BERNOUD-JACANA



シベリアアイベックス *Capra ibex sibirica*　中央アジアにすむ亜種で，アルプスのものよりつのの湾曲が激しく，円形に近くなっている。長いあごひげが大人の風格を見せている（下）

PH. J.-V. SUNDANCE-JACANA



パザン　*Capra aegagrus*

パザンは、胃石ヤギとかノヤギとも呼ばれる、ヤギ属の一種で、飼育種のヤギの原種と考えられている。からだはアイベックスよりもいくぶん小さいが、飼育種のヤギよりは大きい。雄は体長150センチ、肩までの高さは90センチほどになる。雌は雄よりも小さい。

パザンは、弧を描いた大きなつのをもっている。若い雄でも長さ40センチを越え、成熟した雄では150センチに達することさえある。つのはつけ根のところから、規則正しい曲線を描いて後ろに曲がり、先端に近い部分ではカーブが少しゆるくなっている。ざらざらした横ひだがあるが、アイベックスのような、高い節状の隆起はない。

雌雄ともに、かなり密生したあごひげがある。毛並みは、比較的細い羊毛状の下毛と、長くてざらざらした上毛とからなっている。毛色は灰色と明るい赤色で、背には濃褐色の線が通り、肩の周辺とあごひげも、同じように濃い色をしている。

分布地域は、西パキスタン、アフガニスタン、イラン、イラク、ソ連のコーカサス地方、トルコである。またクレタ島、シクラデス諸島、モンテクリスト島など、地中海のいくつかの島にもいるが、これは土着のものかどうか、はっきりしていない。というのは、かなり古い時代に、人間が小アジアから移入したことも大いにありうるからである。いずれにせよ小アジアの先史時代の遺跡から、パザンの骨が発掘されているので、古くから人間が利用していたことは確かである。

分布地域が広いので、パザンの体形は地方により少しずつ違っている。たとえば、アジアのパザンはエーゲ海にいるものより大きい。

高所で目をまわすことはない

パザンは、40〜50頭の群れをつくって生活している。交尾期の始まるころ、すなわち秋の半ばになると、この群れをといて、6〜8頭の小さい群れをつくる。冬の終わりに、ふつう2頭、ときには3頭の子を生む。

パザンの習性は、アイベックスによく似ている。どんな危険な山道でも、速く確実に駆ける。絶壁の上に突きでた岩の上に、何時間もじっとしていることがあるが、目をまわすようなことは決してない。急な斜面もうまくよじ登り、足場の悪いところでもやすやすと跳躍する。



パザン（クレタヤギ亜種）
地中海を見晴らす小島で草を食べている
クレタでは、古代から家畜として
飼われていたので、これが移入されて
野生化したのかもしれない（上）
PH. BIDAULT SELECTION FAUNA

パザン　胃袋にたまる胃石は、毛や植物繊維
やかすが固まってできたものだが
かつては万病の薬とされ、猟師たちはパザンを
もっぱら胃石だけを目あてに追いかけた（下）
PH. R. LOSTER

異常なほど警戒心が強いので、外敵による危険はたいていうまく避けてしまう。感覚は実によく発達している。鋭い嗅覚できゅうかくで遠くから敵のにおいをかぎわけ、鋭敏な聴覚でごくかすかな物音も聞きとる。その利口なことは、アイベックスにも匹敵する。

トルコの山人たちは、オオムギのとりいれが始まる少し前に、ハザンの子を生けどりにする。かれらは、出産の近い腹の大きな雌が、人間がめったにいかないような場所にある隠れ家に、規則的にもどっていくのを見つけると、その隠れ家の近くに身をひそめる。子が生まれてから2、3日たつと、人びとは母親を追いはらって、子どもたちを生けどりにする。村に連れ帰ると、初産をしたばかりのヤギの雌に、そのハザンの子を育てさせる。しかし、何度もお産をした雌ヤギでは、自分の子どもでないことをすぐに見分けてしまうので、ハザンの子を育てさせることはできない。

《胃石》の効用

ハザンは無害な動物なのだが、その胃石をとろうとする人間が情容赦なく捕えたので、著しく減少した。

ハザンの雌の成獣の胃袋には、他のどの反芻はんすう動物よりもたくさんの胃石がある。この石は、毛や植物繊維や食べ物のかすの混じったものが固まってできたものだが、奇跡的な薬効があると誤って信じられ、猟師はこの胃石を求めてハザンを追いまわすことになった。かつて国王たちは、この胃石の売買の管理権を独占し、重要な収入源にしていたほどである。

しかしナチュラリストのボーチウスは、すでに17世紀のはじめに、胃石には一般に信じられているような薬効はないと、断定していた。またトルコの商人たちは、この薬石をサルの胃からとったものと称して、ヨーロッパの人びとに高く売りつけたりしていた。実際には胃石はハザンの胃にだけあるのではなく、他の多くの反芻動物の胃にもあるので、それほど珍しいものではない。

胃石が薬にはならないとしても、ハザンは他の面で人間に利益をもたらしている。肉は子ジカの肉のように柔らかく、風味があって、味は上品である。生のままでも食べられるし、適度に乾燥させて保存することもできる。イスラム教徒は、ハザンの冬毛で、お祈りのときに使う敷き物を織る。この織物には独特な香気があるので、非常に高価に取引きされる。皮は袋をつくるのに使われる。つのからは、サーベルの柄やナイフの柄など、さまざまな道具がつくられている。

ハザン　飼育種のヤギの祖先といわれ、ノヤギとか、胃石ヤギとも呼ばれる。雄のつのはよく発達して巨大なものとなり、長さ1.5メートルに達することもある。

PH. B. LOSTER



マーコール　*Capra falconeri*



マーコール　ウシ科ヤギ属
ネジツノヤギとも呼ばれるが、その名のとおりのすばらしいつのは、実はたいして役にもたたず重くてかさばるばかりである。

PH. MAGNUM-ARNOLD

マーコールは、ファルコナーアイベックスとか、ネジツノヤギとも呼ばれる、野生のヤギ属の一種である。飼育種のヤギに近い種で、飼育種の原種とする説もある。

からだの全長は150センチほど、そのうち20センチは尾の長さである。肩までの高さは、80センチほどある。力が強く体重も85～110キロくらいある。首は長いほうで、頭部は大きく、体毛は豊かである。

とりわけ人の目を驚かすのは巨大なつので、雄では長さ100センチにもなることがある。2本のつのは根もとでは非常に近接しており、外側に向かってらせん状にねじれながら、いくぶん後方に傾いて、まっすぐにのびている。雄ではこのように、コルク抜き、あるいはネジのような形をしているが、雌のつのは長さ25センチ以下で、らせん状にはなっていない。

マーコールのつのは、ナチュラリストが超肥大器官と呼ぶものの一例である。すなわち進化の過程で、害になるくらい大きくなりすぎた器官である。事実、マーコールは、重くてかさばるつののおかげで、自由に動きまわることもできず、疲れやすいうえに、外敵の目につきやすい。そこでこのつのは、狩猟(しゅりょう)家を誘惑するすばらしい記念品となってしまっている。

ほかに超肥大器官の例としては、マンモスやバビルサ〔セレベス島のイノシシ〕のきばがあるが、このきばは長くのびて頭部の皮膚にくいこんでいることさえある。こうした例は、長い間にわたっての動物の形態上の進化が、必ずしもその動物にとってつごうのよい特質をもたらすとはかぎらないということを示している。

マーコールの毛は、首の上、肩、腰までの背の正中線（せいちゅうせん）に沿った部分では非常に長くのびて、一種のたてがみとなっている。また、あご、首、胸では毛が密生しており、あごひげと胸飾りになっている。毛色は、夏は灰褐(かっしょく)色をしているが、冬が近づくと毛の先端がぐっと明るい色になる。

マーコールの分布地域は、トルキスタン南部、アフガニスタン、それにインドのカシミール、パンジャブ地方である。チベット領ヒマラヤの、もっとも標高の高い地域にもすんでいる。

他のヤギ属の動物と同じように、ふつう雌雄がそれぞれ別に群れをなして生活していて、季節により移動しているが、いずれにせよ山岳地帯か荒地に限られている。習性はアルプスアイベックスによく似ているという。

ヤギ属の分類

今泉吉典

種のレベルで動物を分類するには，細分主義と統合主義とがある。イギリスのライデッカーは細分主義者で，1913年にヤギ属に９種35亜種を認めた。ところが統合主義者のハルテノースは，1963年にそれらをわずか４種25亜種にまとめてしまった。

歴史的に見ると，今世紀のはじめまでは細分主義が流行していた。そしてしだいにいき過ぎと思われるほどの細分が行なわれるようになったため，それを訂正しようとする統合主義が台頭し，今日の統合主義全盛の時代を迎えたのである。したがって統合主義は，細分のいき過ぎの改善であり，統合された「種」は，真の「種」にいちだんと接近したもののように見える。だがはたしてつねにそういえるものかどうか。

生物の個体は，それがどんな生物でもどれかの「種」に属している。ところで個体は一時的な存在にすぎず，それがもつ遺伝子は両親から受けついだものである。個体は同じ「種」に属する別の個体と交配して，子という別の個体をつくり遺伝子を伝える。だが別の「種」に属する個体と交配することは，自然状態ではめったにない。まれには他の「種」との交配も起こるが，そうしてできた子にはほとんど繁殖力がなく，子孫をつくることができない。

したがって遺伝子は，１つの「種」のなかでは個体から個体に伝えられるが，他の「種」に伝えられることはほとんどない。

このような見方からすると，「種」には一定の遺伝子がプールされており，それらの遺伝子の一部分ずつをその「種」に属する個体が分けもっているわけである。このようなことができるのは，「種」に属する個体がたがいに交配する能力をもつが，他の「種」の個体とは交配しないためである。現在もっとも広く認められている生物学的な「種」とは，このようなものである。

統合主義のいき過ぎ

ハルテノースはヤギ属を，アイベックス，ノヤギ，マーコール，ツールの４種としたが，これは上記のような「種」に相当するものだろうか。

アイベックス，ノヤギ，マーコールは分布域が一部重なっているが，中間型は見られない。だからこれらはたがいに交配していないと推定され，明らかに別種である。

ところでかれがツール１種にまとめた，カフカズツールとダゲスタンツールは，一部で分布が重なっており，たがいに交配するから，同一種と見られないことはない。だがよく調べてみると，両者のあいだの子は数が少なく，１代限りで繁殖力がない。したがってこれらは明らかに別種なのである。

さらにハルテノースは，アルプスアイベックス，シベリアアイベックス，ヌビアアイベックス，ワリアまでも，ツールに含めている。これらとツールのあいだの形態的な違いはきわめて顕著で，多くの研究者が別の亜属として区別しているくらいであるから，これら全部を同一種としたハルテノースの統合主義は，どうみてもいき過ぎとしか考えられない。

ヤギ属の場合は，たまたま２種のツールが同じ地域に分布していたので，統合しすぎた分類を訂正できたが，そのような例がなかったとしたらどうだろう。大胆すぎる推定に基づいた統合主義の分類は，細分主義よりもはるかに多くの主観を含む点において，むしろいっそう非科学的であり，真実から遠ざかる危険をはらんでいる。

次に示す分類は，フレシコフによる分類を一部訂正したもので，エラーマンやライデッカーの分類に酷似したものであり，現状ではもっとも妥当な分類のようである。■

ヤギ属の分類表

ヤギ亜属　*Capra*
- ヤギ　*hircus*
- パザン　*aegagrus*
- マーコール　*falconeri*

ツール亜属　*Turus*
- カフカズツール　*caucasica*
- ダゲスタンツール　*cylindricornis*
- ピレネーアイベックス　*pyrenaica*

アイベックス亜属　*Ibex*
- アルプスアイベックス　*ibex*

シベリアアイベックス亜属　*Aegoceros*
- シベリアアイベックス　*sibirica*
- ヌビアアイベックス　*nubiana*
- ワリア　*walie*

ヤギ亜科の仲間

本文のウシ科の分類は，ほとんどシンプソンによっているが，かれはヤギ亜科をヤギ族，シャモア族，ジャコウウシ族，サイガ族の４族に分けている。族（Tribe）というのは，亜科と属の中間の分類群である。

ヤギ族 *Caprini* には，ヒツジ属，バーバリシープ属，バーラル属，ヤギ属，タール属が含まれる。多くは鼻鏡がなく，乳頭が２個で，尾下腺（びかせん）をもつのが特徴である。

シャモア族 *Rupicaprini* には，シャモア属，シロイワヤギ属，カモシカ属，ゴーラル属，ターキン属が含まれる。鼻鏡があり，乳頭は４個で，尾下腺はない。ほとんどのものが蹄間腺（ていかんせん）をもち，つのは円筒形でねじれはない。

ジャコウウシ族 *Ovibovini* は，ジャコウウシ１属１種である。鼻鏡は左右の鼻孔の間に限られ，眼下腺（がんかせん）がある。乳頭はふつう４個である。

サイガ族 *Saigini* は，サイガ属とチルー属を含む。鼻に特徴があり，鼻根部がふくれている。雌にはつのがなく，平原生であることから，しばしばレイヨウ類に属するとみなされることがある。だが下あごの門歯はレイヨウ類と違って，歯冠部の長い長歯であるし，眼窩（がんか）の縁がやや筒状に側方に突きでていることなども，レイヨウ類とは異なりヤギ亜科に一致している。おそらくヤギ亜科とレイヨウ類の中間のものであろう。

以上がヤギ亜科の大観だが，つぎにヤギ亜科に含まれる動物のうち，本文で取りあげられなかったものを解説しよう。

バーラル *Pseudois nayaur*

バーラルはブルーシープ（青ヒツジ）とも呼ばれるように，一見ヒツジに似ていてあごひげがなく，右のつのはねじれが右巻きで左のつのは左巻きという，「順巻き」である。ヤギ属ではほとんどのものが，右のつのは左巻き，左のつのは右巻きという「逆巻き」なのである。

しかし眼下腺，蹄間腺，鼠蹊腺（そけいせん）のないところはヒツジ属と異なり，ヤギ属に等しいから，両属の中間のものと見ることができる。

体長は115～165センチ，尾長10～20センチ，肩までの高さ75～90センチ，体重は雌では25～45キロ，雄では40～80キロになる。つのは雌雄ともにあり，長いものでは約80センチに達し，基部の断面は三角形か円形で，表面はほとんど平滑になっている。からだの上面は青灰色または褐灰色（かっかいしょく），下面は白く，上下両面の境に黒い線がある。

モンゴル，チベット，中国の甘粛（カンスー），四川（スーチョワン），ネパール，インドのカシミールの標高3600～5000メートルの草地にすむ。夏は10～50頭，ときには200頭にも及ぶ，雌雄混成の群れをつくっているが，９月にはいると１頭の雄と数頭の雌とからなる，ハーレムを形成する。

タール属 *Hemitragus*

タール属には３種があり，ヒマラヤタール *H. jemlahicus* はネパールとインド北部に，ニルギリタール *H. hylocrius* はインドのニルギリ丘，西ゴーツ山脈に，アラビアタール *H. jayakari* はアラビア南東部に産する。

どの種も，雌雄とも短い三日月形の「逆巻き」のつのをもち，長毛のヤギに似ている。確かに眼下腺，蹄間腺，鼠蹊腺がなく，尾下腺があるところなどは，ヤギ属に一致する。だが乳頭は，アラビアタールでは２個らしいが，他の種では４個で，他のヤギ族の種と異なり，顕著な鼻鏡があることとともに，シャモア族に似ている。

体長130～170センチ，尾長10～20センチ，肩までの高さ60～100センチである。体毛は，ヒマラヤタールでは首から肩にかけて長く，たてがみ状で，全体に濃褐色である。ニルギリタールとアラビアタールでは，たてがみはなく，毛色は

——→ ＊



ゴーラル　北京動物園にて　　撮影　河野通敬

ヒグマと2人のイノシシ 42

ナガラ族の遊び

畑　正憲

どんべえがナガラ族であるのがはっきりしたのは，スベリ台をうまく利用出来るようになってからである。

ある朝，妻が言った。

「見てよ。そのうち三輪車を上までくわえ上げるから」

「まさか……」

「いいえ，絶対です。さっきは半分まで持ち上げたのですから」

どんべえはスベリ台に飽きて，合成樹脂のボンデンでひとりサッカーをやっていた。はじいて壁に当て，はね返ってくるものをまたはじく。力が強いので，壁が壊れやしないかと心配になる位だ。

そのうち，

「ガチャーン」

と大きな音がしてボンデンが三輪車にぶつかる。と，三輪車を思い出したらしく，今度は左手をサドルにかけ，右手でボンデンをはじく。

それにも飽きるとスベリ台である。すべり下りる板の方からよじ登り，腹這いになってドスン。2回か3回繰り返すと，次には三輪車に目をつけた。

妻が僕をつついて，

「それごらんなさい」

「うん」

「頑張れ，どんべえ」

「それ，力を出せ」

まったくやんちゃ坊主と言う他はない。頭でぐいぐい押すかと思えば，自分が先に這い上がりながら口でしっかりくわえている。

ドスン，バタン。

失敗する度に，わが家は大変な騒音に悩まされることになった。

結局，成功するまでに約1週間かかった。三輪車を上までくわえ上げた時の誇らしげな顔ったらなかった。上が狭いのでちょっとよろけてはいたが，目や唇に昂然とした覇気があった。僕たちは家族打ち揃ってその偉大なる成功に拍手を送ったのだった。

スベリ台の上に運ぶのは，三輪車だけではなかった。ボンデンや板きれ，時には食器までくわえて上がった。

お化けゴッコまでスベリ台に結びつけるのには驚いた。毛布をくわえ，しゃにむに登るのである。たまには足を踏みはずして落ちたりするが，平気の平左である。どんべえとはよくぞ名づけたもので，自分で痛い目に会った時には悲鳴ひとつ上げなかった。なにしろ，天井近くまでよじ登り，まっさかさまに落下しても，2秒か3秒，

「効いたあ」

といった顔つきをしているだけなのだから，生まれつきの鈍べえなのだろう。それでも，1度だけ悲鳴を聞いた。それは，後足を両方持ち，思いっきり顔の方へ押し，つまり力いっぱいエビ固めの状態にした時だった。

「ヒィー」

と，世にもかなしげな細い声を出した。後にも先にもそれだけだ。ぶん殴った時には，はずみをつけた攻撃音を出し，後に甘える時の鼻声を出しただけだ。

怪鳥音の方は，離乳と共にめっきり回数が減ってしまった。日に3度か4度，灯を消した直後，短く区切った怪音が聞かれるだけだった。懐中電灯でそっと調べると，そんな時どんべえは毛布の端をくわえていた。

ケッ，ケ，ケ，ケ，ケ……。

その音と乳房との間に関係があると僕は前に指摘して置いたが，成長するにつれてコマイの干物と密接なつながりが出来た。

コマイは氷下魚という漢字を当てられるタラ科の魚。身のしまった淡白な味であり，チリ鍋，三平汁，フライ，てんぷら，何にしても美味しい。が，最もポピュラーなのは干物で，最近では袋につめられたコマイが空港などでも売られている。生干しを焼くのが最高であり，次には秋の小振りなコマイ，春に乾かしたかたいものは石で叩いて食べたりする。

耳学問による僕の辞典には，主に春と秋に沿岸に押し寄せる魚だと記憶されていた。ところが，自分で網を入れてみると，夏にもごっそり獲れるのである。おかしいなと思って訊くと，漁師が答えてくれた。

「それはハエだべ。夏の間はハエが卵を産みつけてウジがわく，そんで干物にはハァ，ならねえべよ。春と秋には外に並べて置くだけで乾いて，値が違ってくるし，生だらおめえ，魚箱1杯で100円を割ることもあるしな」

獲ろうと思えば獲れるのだが，干物に出来ないので漁師は網を入れないのである。夏にコマイを水揚げしていたのは鹸暮帰密漁協会だけで，干物にする間もあらばこそ，動物たちが先を争って食べてしまった。

春干しのコマイは石のようにかたい。この地方の人々は，それを半分に折り，皮をはいで爪でほぐして食べるのである。それこそ，酒のさかな，おやつ，お弁当のおかず……口に何かを入れる際には必ずコマイがお供をしている。

動物もコマイの干物が大好きである。キツネやタヌキ，このところ急に増えた



遊び好きのどんべえは，掃除をする畑さんのほうきにまでかじりついてきた

カラーページ解説

*————→

前者では暗黄褐色，後者では淡黄褐色をしている。いずれも岩山に30～40頭の群れですみ，見張りがいるため接近するのは容易でないといわれる。

ゴーラル属 *Nemorhaedus*

ゴーラル属には2種があり，ゴーラル *N. goral* はネパールとインドのカシミール，シッキムに，オナガゴーラル *N. caudatus* はインドのアッサム，ビルマから中国を通り朝鮮，シベリア東部のアムールに分布する。

カモシカ属にごく近縁で，わずかに眼下腺がないことと，頭骨の形態で区別される。体長95～130センチ，肩までの高さ55～80センチ，尾長はゴーラルでは7，8センチだが，オナガゴーラルではやや長く，11～15センチになる。

ヒマラヤでは，標高900～2400メートルの，岩の多い森林に多く，4～8頭の小群ですむ。

ターキン *Budorcas taxicolor*

中国の西部から，ビルマ，ブータンに分布する。蹄間腺がなく，鼻鏡が小さく，つのが太いところが，シャモア族の多くのものと異なる。また足の骨も変わっているので，本種だけを別の亜科にすることさえある。

からだは大きくがんじょうで，雄は体長210～220センチ，尾長15～20センチ，肩までの高さ110～130センチ，体重300～350キロに達する。雌はやや小さく体長170センチほどである。毛色は亜種によって異なり，ブータン，ビルマのものは灰褐色で背に黒線があり，頭，首，腹，尾と四肢（しし）は黒い。中国のものは，雄の夏毛は美しい黄金色で，四肢と後半身が灰黒色だが，冬毛は灰色で，雌は1年じゅう灰色である。

四川では，標高2400～3000メートルの竹林やシャクナゲの林に，5～15頭の群れですむが，雄は単独で生活しているらしい。

チルー *Pantholops hodgsoni*

チベット，インド北部ラダックの，標高3600～5400メートルの高原にすむ。ふつう4，5頭の小群で生活するが，ときには40頭から200頭もの大群をつくることもある。

雄は体長120～130センチ，尾長18～30センチ，肩までの高さ90～100センチ，体重25～30キロである。つのは長く，60～68センチに達し，直立している。体毛は羊毛状で厚く淡黄褐色，顔と四肢の前面は黒い。雌は雄よりもやや小さく，つのがなく，黒斑もない。架空の動物，一角獣のもとであるという。■

イヌたちも，1日に1尾ずつ貰う干物を楽しみにしている。

どんべえも好きだ。かたいコマイを嚙みあぐね，途中でひと休みしたりして，1時間も2時間も格闘している。ペットショップなどで生ゴムをかためたものを「ドックバイト」とか「イヌのガム」として売っているが，コマイならば栄養も豊かだし，僕たちは「どんべえガム」と呼び，なるべく多く食べさせるようにしむけた。

嚙んで嚙んで，干物の片端が唾液で濡れ，やわらかくなってくると，どんべえは腹這いになって切なそうに怪鳥音をもらした。

ケ，ケケケケケ。

目をつむり，前足で床をひっかき，身をよじらんばかりである。母親の乳房の感触と唾液に濡れたコマイの感触とが，相似通っているのは確かだった。

僕はどんべえの横に並び，好物のヨーカンとコマイを交換し，同じ姿勢でコマイの切れ端を含んでみた。どんべえが嚙んでやわらかくしたその端は適当にあたたかく，乳が出なくなった乳首をしゃぶっている感じがした。



島の周辺は魚の宝庫だ　畑さんが入れた網にも，いろいろな獲物がかかる

乱杭歯がキチンと整列し始めたのもこの頃である。前にせりだす感じで整列し，綺麗な歯並びになった。僕は子グマの精神的な発達に注目し過ぎたようだ。どうしてもっと細かいデータをとらなかったかと後悔したが，後の祭りである。爪の長さや歯の数，鼻孔の直径まで，くわしく記録して置くべきだった。

さて，ナガラ族としての特徴は，日を追ってはっきりしてきた。スベリ台を使わない時にも，ボンデンを1個小脇に抱え，細長い木のウキを口にくわえてひねくりまわした。ボンデンが偶然脇の下にはさまったのでない証拠には，遊んでいる間にするりと横へずれた時などに，つと起き上がり，四苦八苦してまた小脇にかいこんでどたりと倒れ，両方を一緒に楽しむ体位になるまで執拗に努力した。

一度楽しかった姿勢を記憶していて，その状態に達するまで，あきらめずに遊びを続けるようでもあった。これは外でも同じことであり，家の斜め前に池を作ってやったら，単純な水浴びに始まり，木片を持ち込んで遊びを複合するようになり，それが更に複雑になっていった。板切れを1本肩に，口にはウキ，両手には石といったポーズが，どんべえの得意な瞬間でもあった。

僕はそれを眺めながら，この飼育記録が1年で終わるわけがないと思った。まだどんべえは稚いが，僕たちの間に確立しつつあるつき合いのルールは，きっとこれからも守られるだろう。それだけの賢さを持つ動物に見えた。■

十二支の話

1

プロローグ

竹内照夫

昨年，つまり昭和46年は亥（い）の年とされ，今年は子（ね）とされているが，このように毎年にあてがわれる動物の数は12あり，これを十二支と呼んで，その順序は一定している。すなわち，子(ね)・丑(うし)・寅(とら)・卯(う)・辰(たつ)・巳(み)・午(うま)・未(ひつじ)・申(さる)・酉(とり)・戌(いぬ)・亥（い）である。

十二支はもともと中国古代の暦術用語で，1年を12か月に分けるために設定された，天の円周上の12区分の名である。これに関連して，地上を8つの方位に分けるための，各方位の名にも用いられたのだが，動物と対応させる以前のこうした本来の意味では，十二支の子丑寅卯……の文字の読み方は，し・ちゅう・いん・ぼう……というふうに字音よみにするほかはない。

《十二支と動物》

古代に，1年を12か月に分けるための暦術用語として設けられた十二支に対して，やがて12種の動物が対応させられるようになった。その結果として，われわれ日本人の間では，子丑寅卯……を，ね・うし・とら・う……と読むようになったわけだが，どうしてこのような動物との結合が始まったのだろうか。

これは古代的な動物信仰や，日月星辰に対する神秘主義的な想像から生じたことであって，往古のギリシャ人が，星座に対して動物や諸事物の形状を見立てたあのやり方に類する考え方が，中国人にもいだかれていたのである。十二支と諸動物との結合については，インドもしくはその他の西方社会の信仰や思想が，漢民族に取り入れられたものであろう，とみる人もあるが，必ずしもそうではなく，類似する想定が別々に東方にも西方にも起きたと考えてよいだろう。なお8方位と十二支との対応は図のようである。

十二支が8方位に配当されたのち，さらに十二支は1日を12刻に分けるための各刻の名としても用いられるようになったから，その配当法をも合わせて図示した。1刻は今の2時間である。

《十干，五行，および干支》

古く中国でつくられ，今もなお伝承されている暦（こよみ），すなわち〝旧暦〟では，十二支は十干と組み合わされ，〝干支〟として用いられる場合が多く，和語ではこれをえとと呼んでいる。

えとはたんに十二支の意味だけで用いられることもあるが，正しくは十干をさし，転じて干支をさし，さらに転じて十二支のことにもなった。

十干とは，甲（こう）・乙（おつ）・丙（へい）・丁（てい）・戊（ぼ）・己（き）・庚（こう）・辛（しん）・壬（じん）・癸（き）の10個の記号である。中国の古暦上で，1か月（約30日）を上・中・下の3旬（1旬は10日）に分けた際に，1旬の最初の日を甲とし，順次に乙丙丁……と呼んだのが十干の起源である。そして，これとは別に，古く五行説という自然解釈の学説があって，これが十干の記号に結合されて，「甲」は木の兄（きのえ），「乙」は木の弟（きのと），「丙」は火の兄，「丁」は火の弟，「戊」は土の兄，「己」は土の弟，「庚」は金の兄（かのえ），「辛」は金の弟，「壬」は水の兄，「癸」は水の弟と見られるようになった。

さて，十干によって1旬10日に順序づけをするだけでは，カレンダーが簡単に過ぎて不便が感ぜられるようになると，十干と十二支とを組み合わせて得られる120干支の，その半分の60干支を用いて毎日毎日に順序をつけ，約2か月で一巡する方法が設けられた。しかし，この序列法はやがて年の順序にも使われることになり，そこで〝ことしは辛亥（かのと・い）の年〟とか，〝来年は壬子（みずのえ・ね）〟とか称し，人をその生まれ年の干支に応じて，〝この人は乙未（きのと・ひつじ）〟とか，〝あの人は丙午（ひのえ・うま）〟とか呼ぶような俗習をも生じたのである。

以上の諸事は，これから述べる十二支それぞれの話に関係が深いので，ほぼその要領をしるして前置きとしたわけである。■

（中国文学者）



え　貝原平助



読者のアルバム　8

わが家のアマガエルたち

写真と文　長谷川伸子

一昨年の秋の終わり，庭のヒメヒマワリの葉にアマガエルが日なたぼっこをしていた。チンマリと背を丸めた姿がなんとも愛らしく，それにそろそろ寒くもなることだし，というわけで家の中で飼うことにした。

名まえは「トビスケ」と「ジュン」。すまいはプラスチックのかご。はじめのうちはおどおどして逃げようとしていたが，4,5日もするとあきらめたのか，生きのよいイトミミズを目の前に置くと，とびついて食べるようになった。2,3か月後には，ふたをしなくても逃げないようになったが，しかしときどき，「いない，いない」と大騒ぎの人間たちをしり目に，新聞紙の間にすわりこんでいたり，ペン皿の中でぐっすり眠りこんでいたりする。

暖かくなったら庭に帰してやるつもりだったが，別れを惜しんでいるうちに時を逸してしまった。せめてもの埋め合わせにと，せっせと葉を取り替えたり，かごごと日光浴させたり，果ては脱皮の手伝いまでしてやるのだが，主人は「過保護の囚われのカエルたちよ」とかれらに同情している。■（大分市・32歳・主婦）

ペット相談室



〈問〉　10日ほど外出して帰ってきたネコの口がゆがんでしまい，しまらなくなりました。あごの骨が折れたためで，なおらないそうですが，どうしたらいいでしょうか。（西宮市・西尾知佐子）

〈答〉　あごの骨の骨折は，その折れた場所によってはなかなか治療がむずかしいものです。ほとんどの場合，下あごの骨が折れるもので，前歯の下が折れて左右に分かれてしまう場合がいちばん多いようです。この場合は左右の犬歯（きば）を，あごの骨とともに針金でしばりつける方法がいちばんよいでしょう。3週間ぐらいで，骨はすっかりついてもとどおりになります。

横のあごの骨が折れると，ちょっとやっかいです。1か所が折れる場合，片方の骨が2か所で折れる場合，両側でそれぞれ1か所，または2か所で折れる場合など，さまざまな折れ方をします。X線写真をとらないと，どこでどのように折れているかは，さわっただけではなかなかわかりにくいものです。

種々の方法の手術がありますが，せっかく手術をしても，口を強く動かしたり，口をものにすりつけたりするので，よほどしっかり固定しないと，折れ口がはずれてうまく骨がつかないものです。そういうことが予想される場合とか，複雑骨折がある場合は，口のなかをさわらないで，顔の外からあごを包んでしまったほうが，結果がよい場合が多いようです。

幅広いばんそうこうで，あごの下からほおと頭をすっかり包んでしまうのです。ほんのわずかに口が開けるくらいで，つまり舌の出し入れができる程度にあごを固定してしまうわけです。ちょうどほおかむりを逆にした格好で，あごが動かないように，また，開かないようにするわけです。こうして1か月くらいたつと，折れたところがぴったりとはいかなくても，また折れ口が多少ずれてはいても，固まってしまいます。

こうなれば折れたままで口がしまらず，食べ物もろくろくとれないような状態は避けられ，じょうずに食事もとれ，水も飲めるようになるものです。しかし，これらの処置は，骨折してからすぐにしないとうまくいきません。1か月もたったものでは，はたしてうまく固まるかどうかわかりませんが，一応ためしてみるといいでしょう。

あごがしまらないもうひとつの原因に，あごの関節の脱臼があります。あごがはずれた場合です。骨折のときと違って，あごを動かすと，下あごの骨全体がひとつとなって動き，前後にも移動し，痛みもあまりありません。ただ口を動かすことができず，口を開いたまま舌を出し入れするだけです。

あごの脱臼の整復は，口のなかに小指くらいの太さのかたい棒を横に（ちょうどさるぐつわのように）奥深くはめこみ，それを支点にして，下あごの先を上あごに強く押しつけるのです。あごの上下の奥歯で棒をかまして，口を閉じさせるようにするわけです。うまくいくとコクリと音がして，関節が元の位置にもどり，なおってしまいます。骨折も脱臼も，専門家にみてもらわないとその手当もむずかしく，とくに下あごの複雑骨折はなおりにくいものです。

また，骨折や脱臼がなくて，口のしまらないことがあります。これは下あごを動かす筋肉とか，神経の麻痺で起こります。この治療は，それぞれの症状により異なりますが，脳とか頸髄の異常から起こるものが多く，なおりにくいものです。■（動物愛護協会附属動物病院院長）

裏表紙説明

ヒョウ　木の上から，下を通る獲物をねらっているヒョウ *Panthera pardus*。鋭い目は冷酷に輝いて，真剣そのもの。

アジア南部からアフリカにかけて，広い範囲に分布している。アフリカのものはレオパード，東アジアのものはパンサーとも呼ばれ，とくに東南アジアに多い黒変種を，ブラックパンサーという。ブラックパンサーはヒョウのうちでもとくに精悍で，気性が荒いといわれる。

ヒョウは木の上でも，平地でも，森のなかでも，動作が非常にしなやかで，耐久力も強い。毛皮を求める人間にしつこく追われても，しぶとく生きのびている。アメリカ合衆国の人種差別政策のなかで，きびしい弾圧を受けたブラックパンサー党に，海のかなたから連帯のあいさつを送っているのか。■

Ph. Myers-Afrique Photo

仲間のひろば

子リスの誕生

一昨年の6月ごろから，雌雄2匹のシマリスを飼いはじめた。朝は明るくなれば巣箱から出て，くるくるとんとんと活発な運動を続け，太陽の沈むころ箱にはいって寝る。9月のある朝，きのうまで元気だった雄リスがのびたまま起きあがらない。調べてみるとすでに死んでいた。暑さに弱いという話を聞いて，いきとどかない飼育を悔んだ。

それにかわる雄を求めたところ，しばらくはなじまなかったが，まもなく仲良く元気に遊ぶようになった。冷気を覚えるようになったころ，敷いてある新聞紙を裂いては巣箱に運ぶので，柔らかい布を細く裂いて与えた。雌の食欲がおう盛になり，雌が先に食べてその残りを雄が食べるようになった。妊娠したのである。巣の中にクルミやヒマワリの中身を，紙のあいだにくるむようにしてたくわえだした。

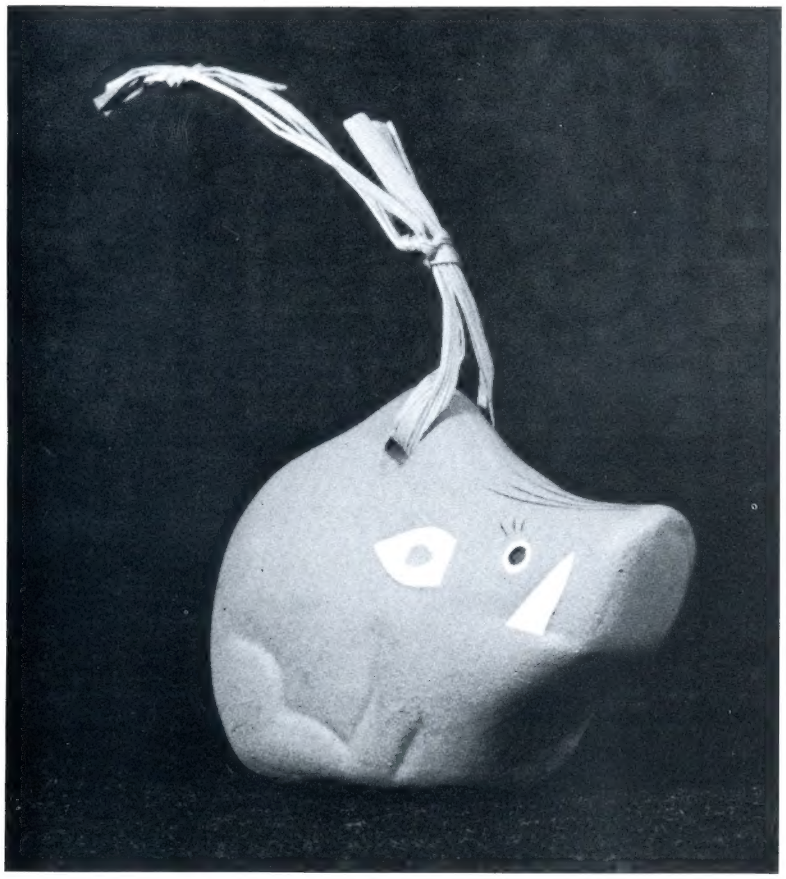
ある朝，雌の姿が見えないのでいよいよ出産であることを知った。母リスが安心できるように，かごに風呂敷をかけ，昼は暗い静かな所へ，夜は比較的暗い風呂場へと運んだ。両3日経て，ニンジンの切れ端かと思われるような赤子を口にくわえてでてきた。が，その赤子もあっけなく死んでしまった。昨年3月のことである。

初産の赤子を失ってがっかりしている間もなく，例の産前の準備が見られるようになり，4月の末に2度めのお産があった。前回の失敗にこりて，母子のかごは元のままにして，なるべく刺激を与えないようにと，雄リスとの間にも板を置いた。母リスはときおりクルミやミカンを大急ぎで食べては巣にもどる。巣の入り口は母リスの思いやりで，柔らかいちり紙でふさがれている。生後30日を経て，やっと子リスが3匹そろって出てきた。

その姿は母リスそっくりで，頭は比較的大きく，胴体はやや細めであり，足もとはよたよたとし，尾も貧弱だった。しかし3,4日もたつと，母リスのまねをして止まり木を渡り歩き，金網にはいあがった。やがて，太くなってきた尾の毛づくろいをするようになり，3匹とも元気に，目に見えて成長していった。■

（東京都狛江市・斉田清子・70歳）

のごみ人形　猪の土鈴



猪そのものを造型化したものはあまり多くない。近世武家風俗画の狩猟図，たとえば富士巻狩図などに勢子に追われる姿で描かれたり，曽我物語図の何かの例の仁田四郎に仕とめられる話に登場するくらいで，したがって名品と称し得るような作例はほとんど見当たらないのである。

そこで今回は，郷土玩具に作られた猪を探した。これは，佐賀県鹿島市能古見で作られている〝のごみ人形〟という土焼である。のごみ人形には，稲荷駒，浮立面，浮立人形など，愛すべき玩具があるが，そのほかに，十二支土鈴と呼ばれる12種ひと組を作る。十二支の動物の，それぞれの特色をたくみな形象に単純化して土焼の鈴にしたもので，この鈴を振るところころと鳴り，疫魔退散開運の効験を発するといわれている。いずれも，素焼の面白い形の上を，明るい色彩で彩っている。なかでこの猪の鈴はいちばん地味だ。褐色の体に，真赤な口と，白い耳と牙，それに尻に緑の輪を描くにすぎない。獰猛な野獣ではなく，まじないとして愛される，親しみのこもった猪である。

十二支は，もともとは中国の暦法で，十干と組み合わせて時日につけた呼称であったのが，後世，獣をあてはめるようになった。すなわち子は鼠，丑は牛，寅は虎，卯は兎，辰は竜，巳は蛇，午は馬，未は羊，申は猿，酉は鶏，戌は犬，そして亥は猪が当てられた。日本では今日でも，年のシンボルとして，これらの動物にちなませる習俗が盛んである。のごみ人形の十二支土鈴も，そういう習俗が生み出した民衆の造型のひとつであって，それ故に，今日なお作り続けられている。■　（水尾比呂志）



第１号～第64号（概説・哺乳類）のおもな内容

◉ 数字は号数，白ぬき数字は既刊

世界動物百科　通巻45号　昭和47年1月30日発行（毎日曜日発行）　編集・発行人　大田信男　発行所　朝日新聞社　東京　大阪　北九州　名古屋　印刷・凸版印刷　**定価220円**



● ヒョウ　説明 30ページ

雑誌 0635—1/30